

DPA (DWIDP) JICA 便り

防災対策アドバイザー (Disaster Prevention Advisor) 水資源省治水砂防局 (DWIDP)

No. 4 / 2006 . 12 . 25

12 月に入り、治水砂防局 (DWIDP) 及び筆者の住居があるパタンの街では朝、霧がよく発生しています。秋から冬の当地の風物詩と言われているようですが、温暖化の影響か以前よりは霧の発生が少なくなったとの話も聞きます。カトマンズ盆地からのヒマラヤの山々はよく見えるようになっています。なお 11 月からの 1 ヶ月間においては水に起因する災害は報道されていません。



カトマンズ・ダハチョーク地区から見た Mt.Manaslu 方面 (12 月 15 日)

国内情勢については 16 日に暫定憲法が発表されました。公布は武器管理が終了してからとのことですが平和・安定へのプロセスは確実に進んでいるように感じます。しかしその後、18 日に政府が急遽、各国へ派遣する大使 (駐日大使含む) 等を推薦したため、これに反対するマオイストによるカトマンズ盆地バンダ (交通等強制ゼネスト) が宣言されました。これまで住民による部分的な交通障害 (チャッカジャム) はあったもののマオ派等による組織的なバンダは 4 月に 19 日間続いた時以来となります。この事態が平和へのプロセスの障害とならないことを願います。いずれにしましても安全に十分注意を払いつつネパールの災害の軽減を図り、災害で苦しむ人々が少なくなることを願って活動をしていきたいと思えます。

今年一年、お忙しい中、来訪いただきました皆様方、日本でご支援いただいている皆様方に感謝申し上げます。本当にありがとうございました。来年も引き続きお願い申し上げますとともに、皆様方の新年のご多幸とご健勝を心よりお祈り申し上げます。

バンケ郡・バルディア郡の洪水被災地の現地調査を実施しました

12 月 19 日 (火) から 23 日 (土) の日程で、今年 8 月末に大きな洪水被害を出したネパール中西部のバンケ郡 (Banke District) 、バルディア郡 (Bardiya District) での現地調査を、DWIDP のトラダール課長 (Dr.R.M.Tuladuhar) 、シン監督官 (Mr.K.B.Singh) 、筆者、通訳のシャキヤ氏 (Mr.R.Shakya) 、灌漑局 (DOI) のコイララ技師 (Mr.R.P.Koirala) 、そしてバンケ郡の郡都ネパールガンジにある DWIDP 第 6 事務所のカドカ所長 (Mr.R.



バンケ郡の赤十字支部での聞き取り

Khandka)の参加を得て実施しました。今回の調査の目的は今年の災害の現象・状況を把握するとともに災害発生時に各機関がどのように情報を得て、どのような活動を実施したのかを現地にて確認することです。関係機関として、バンケ郡とバルディヤ郡それぞれの DDRC (District Disaster Relief Committee: 郡災害救援委員会)の長としての CDO (Chief District Officer: 郡知事。内務省からの派遣)、バンケ郡とバルディヤ郡それぞれのネパール赤十字支部、国連の機関である OCHA (Office for the Coordination of Humanitarian Affairs: 国連人道問題調整事務所)のバンケ郡にあるフィールドサブ事務所を訪問し、8月末の災害時の状況と対応、問題と思われる点などを聴取しました。

バンケ郡での現地として、ラプティ (Rapti) 川沿いで最も家屋が被災したインド国境沿いのホリヤ村 (Holiya VDC) では被災した村を住民により案内いただくとともに、当時の救援活動等について聴取することができました。バルディヤ郡ではカルナリ (Karnari) 川を、ネパールで唯一の浮橋を渡りラジャプール村 (Rajapur VDC) およびマナウ村 (Manau VDC) にて、河岸の浸食状況の踏査と住民からの聞き取り等を行いました。今回は洪水被害の現地でしたが、今後、地すべり等土砂災害の現地調査も行い、今年の雨期の豪雨災害の状況をまとめるとともに災害時の情報伝達の様子・各機関等の対応などについてまとめたいと考えています。



バルディヤ郡 CDO への聞き取り



マナウ村での河岸浸食の踏査



ホリヤ村の住民への聞き取り調査

主な出来事・トピック

京都大学岡田教授らが ADB 総会サブイベントの準備のために来所されました

12月14日(木)~17日(日)の日程で、京都大学防災研究所巨大災害研究センターの岡田憲夫教授と大阪大学コミュニケーションデザイン・センターの渥美公秀助教授が、2007



シュリーインドラジョティ小学校にて
(中央: 岡田教授、その左: 渥美助教授)

年5月開催予定の ADB 京都総会における JBIC のサイドイベント「防災とそのリスクマネジメント」をテーマとしたパネルディスカッションの準備等のため来所され、14日に DWIDP、15日に DMSP プロジェクトで住民参加型の対策を指導してきたダハチョークの砂防モデルサイト及び 2002 年に甚大な被害が発生したマタチルタのサイトを視察されました。DWIDP では筆者とトラダール課長によるネパールの災害発生状況、プロジェクト等の活動、

そしてダハチョーク地区をはじめとする住民参加型の事例について説明するとともに、バ

ツタライ局長からも DWIDP の活動状況について説明を行いました。

15 日の現地踏査ではダハチヨーク地区において住民の参加によって施工された植生工を見るとともに、シュリーインドラジョティ小学校における防災教育の実施状況について、5 年生の生徒達そして先生方と意見交換をしました。マタチルタ地区においては、災害時に水に巻き込まれながらもなんとか逃げることが出来た地元の方から災害時の話を聞くことができました。杉本準一郎氏によって制作された彫刻を設置してある場所では、農作業の合間に休む村人達から話を聞くことが出来ました。ADB 総会でのイベントで、今回の現地踏査の成果が活かされればと思います。



地元の女性から災害時の話をうかがう

ジェネラルコーストレーニングが始まりました

12 月 10 日（日）から 1 月 14 日（日）までの日程で、第 17 回ジェネラルコーストレーニング（General Course Training）が、灌漑局、道路局、



筆者による地すべりに関する講義

水文気象局、警察、陸軍などの関係者 12 名の参加を集め実施中です。このジェネラルコースは各省庁等の中堅の技術者（オーバーシー：工事監督官）クラスを対象に治水・砂防の知識を習得させることを目的として DPTC の時代に開始されたもので、現在では DWIDP の情報・訓練課が独自に運営しています。10 日（日）にオープニングセレモニーがあり、18 日（月）には筆者が「Landslide Works in Japan」と題して、日本における地すべりの状況、その

調査と対策などについて話をしました。ネパールでは地すべり対策工のうち、杭工やアンカー工などの抑止工はコスト等で一般的ではないなどの面があるため、考え方を中心に話を進めました。今回の研修が災害時の被害軽減につながればと考えます。

中川前専門家が来ネしフォローアップを実施されました

12 月 5 日（水）から 15 日（金）の日程で、DMSP-FU の災害復旧の専門家であった中川平八郎氏（現 東洋技研コンサルタント(株)技術顧問）が来ネされ、ご自身で指導された DWIDP 第 4 事務所の現場を当時の CP とともに踏査するなどのフォローアップを実施していただきました。今回はちょうど 1 年前に災害調査技術の短期専門家として DWIDP で指導いただいた岩橋氏（復建調査設計(株)）も、ネパールにおける土砂災害等の対策の現状を把握するために同行されました。現地踏査では特に、指導した施設が今年の 8 月、9 月の雨期後半の降雨によって破損しているかどうか、効果はどのように発揮しているか等の確認を第 4 事務所のミシュラ技師らとともに実施されました。12 日には JICA 事務所の徳田所員と津守所員そしてソウラ



第 4 事務所で CP 達と（右：中川氏）

ブ所員とともにカトマンズ・ゴンガブ地区における導流堤等の視察をしました。また 13 日にはバルク地区のマナモハン公園沿いで指導した水制工を視察しました。今回はこの他、岩橋氏とともに設立した小規模な災害復旧用のファンド(基金)である「ウチスファンド」を軌道に乗せるということも目的のひとつとのことで、その第一号の現場をミシュラ技師らと選定していきました。

またネパール滞在中にグループで練習していたマーダル(ネパール太鼓)の練習会にも参加するなど、短い期間のなかで精力的に活動されました。



関係者での現地踏査(ゴンガブ地区)

防災対策アドバイザー活動

NCDM、ネパール赤十字から聴取をするとともに洪水被災地の現地調査を実施しました。

11月28日(日)に、NCDM(Nepal Center of Disaster Management)のポカレル教授(Prof.Dr.J.R.Pokharel)、12月5日にネパール赤十字の防災部門のシルワール氏(Mr.R.S.Silwal)から、活動状況等について聴取する機会を得ました。また12月19日~



NCDM ポカレル教授(中央)

23日にバンケ・バルディヤ郡の洪水被災地の現地調査において関係機関や住民から災害時の状況を聴取しました(現地調査は本文P1~2を参照)。

NCDMはNGO組織であり政府等とは独立の立場で災害対策のポリシー・法律案等を内務省に提示すべく準備中とのこと。この他、ポカレル教授は家屋の耐震化や地震予知についても取り組むなど幅広い活動をしており、多くのセミナー等で教授の発表を見る機会があります。



赤十字シルワール氏(右)の説明

ネパール赤十字はカトマンズの本部と全75郡に支部、各郡内に多くのサブコミッティー等を持ち、災害時には緊急の調査、情報の収集・連絡、救援物資の配布などを行い、特に今年の災害では各NGO等の緊急物資配布の窓口となるなど、中心的な役割を果たしています。この他、平常時のDisaster Preparedness(災害への準備)プログラムな

どもいくつかの郡で実施しているとのことでした。

編集後記

今月も日本から多くのお客様に来ていただきました。特に中川前専門家とは3ヶ月ぶりの再会でしたが非常に懐かしく感じました。帰国の際に、日本から「ヘイハチロー」の「眼」で見たネパールについて本便りへ投稿いただくよう願いました。

編集責任者：武士俊也

電話：+977-1-5535502 Fax：同-5523528 E-mail：dmspfu@wlink.com.np